

1月7日

「あなたには将来がある」

箴言 23:18

武安 宏樹 牧師

「わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている～主のことば～。それはわざわざではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」(エレ 29:11)とあるように捕囚前の末期症状に、エレミヤは偽預言者が気休めを語るのと異なり、正面からさばきを語りつつ、捕囚の彼方にある70年後のヴィジョンまで示すも、民は「その後」のことより、今すぐ「将来」「希望」の実現を願います。未来を思い描けない人々の心の闇に、断罪や正論ありきでなく、慰め主の深い同情をもって寄り添えたら最善です。主イエスは自らへりくだり、罪人と共に滅びの淵から共に主を見上げました。私たちも自身の絶望体験を振り返って、そこからどのように主が引き上げてくださったことか。世の仕事に意味が見出せずに自分を見失っていた3年間、追われるようにして退職後に宣教団体の働きに、充実感と不安定感の3年間、転がり込むように入学した神学校で、学びと奉仕に励む一方で桎梏の3年間、以上の荒野を引き回され、母教会で伝道師として備えられる仕上げの3年間。ある聖日に語ったヨブ記説教から、聖霊の働きに時があることを悟りました。

「希望」の動詞形「待ち焦がれる」「心待ちにする」から、背後に「忍耐」の意が、隠されています。捕囚を前にした民は不満&不安と、即効性のある処方箋を求める心に満ちていました。けれども主はカナンを前に足踏みした荒野40年、異国で自分が何者か問われたバビロン70年、時間稼ぎと言いたくなるような、遠回りを通して、主は私たちとの関係に介在している不純物を取り除きます。農夫の刈り込み(ヨハ 15:)、毒麦の焼却(マタ 13:)で、自分本位の枝葉が撤去され、スッキリして向こうの世界、待ち望んでいた将来と希望が見えるようになる。これこそ聖化で、罪を赦された確信と共に主にいよいよ近づかんと志します。パウロの名言「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」(ロマ 5:4 新共)主が示された将来と希望を見るまでに、信者は以上3段階を踏む必要がある。自分が経験したこととして、隣人の苦境を受け止めた上で、ある時は励まし、ある時は背後で祈り、霊的な洞察を得ながら適切に関わることが出来ます。罪人の無責任による「わざわざ」さえ、「平安を与える計画」へ動機付ける主は、受けた愛を還元することを通して、教会の交わりは似姿まで成長するのです。

1月14日

「真理を知っているから」

I ヨハネ 2:18-25

武安 宏樹 牧師

「今は終わりの時」「反キリスト」など、おどろおどろしい表現が並びますが、「終わりの時」とは特定の年月日を指定しておらず、主が地上に来られてから、現在までの、教会が宣教を担いつつ再臨を待ち望んでいる幅のある期間です。「反キリスト」は本書だけに登場しますが、偽教師&偽預言者&偽兄弟などの、「偽」がつく者全体を差し、ヨハネは教会内の「仲間」が聖書的教えから逸脱し、兄姉を引き抜いたり教会を混乱させたりして、信仰の弱い人が巻き込まれる、一見して素晴らしい人に思えるが、巧妙に浸透する厄介な輩がいると語ります。「彼らとは地上的交流を共有するが、天的出自は共有していない。ただ終わりの日に麦と毒麦との完全な分離が明らかにされるのである。」(ティンデル注解) そんな人々がいるのかと特定することは、私たちのすることではありません。「反キリスト」には定冠詞が無く、人でなく背後の霊の見分けを求められます。まず私たちは御言葉に親しみ、知識だけでなく受肉して悔い改めに導かれて、聖霊の満たしを受けつつ、古い自分を十字架につけ新しい力を受けましょう。「出て行った」人は共通して、明け渡し(=私)を拒む頑なな部分が見られます。

「彼ら」に対し「あなたがた」が対比&強調され、出て行った人を呪うよりも、信者を励まそうとしています。直訳「あなたがたには…ある(英訳'have')」目的語が無いので変ですが、最近の日本語で「持っている人」などと言います。運やツキといった巡り合せでなく、心理学的な行動パターンからでしょうが、「あなたがた」キリスト者は何を持っている、いや何によって持っているのか。それが「聖なる方からの注ぎの油」。旧約では預言者&祭司&王の即位の際に、選ばれた少数の特別な者に注がれたのが、今や全ての信者に特権的に注がれ、私たちが聖書の真理を正しく知るために、聖霊が油を注いで光を灯されます。さらに私たちの内なるエンジンが、錆びつかせることなくなめらかに回って、加えてキリストの肢体の一部の私たちに、信仰にとどまるように励まします。「とどまる」恵みをぶどうの木に喩え(ヨハ 15:5)、「持っている人は豊かになり」山上の説教で語られました(マタ 13:12)。外の方が楽しく思えることもあれど、素晴らしい宝を内に宿している実感から、私たちは主にとどまることができる。出た人が戻るよう祈りつつ、私たちは真理を知る者として愛し合いましょう。

1月21日

「クリスチャンの3つの喜び」

ローマ 5:1-11

武安 宏樹 牧師

こうして、わたしたちは、信仰によって義と認められたので、わたしたちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。神との平和とはイエス様を信じて仲良くなること。

①神の栄光を喜ぶ(2節)「神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。」

神の栄光とは？ あなたの望みは何ですか？

cf. ヘブル人への手紙 12:1-3

私たちはこの世で1番でなるのではなく、人生のゴールは天国です。

②苦難を喜ぶ(3～8節)「苦難さえも喜んでいます。」

苦難が喜び？「苦難が忍耐を、忍耐が品性を、希望を生み出す」

艱難を喜ぶとは「それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っています。」そして、この希望は失望に終わることがありません。

希望は失望に終わることはない。神の愛のゆえに。

聖霊によって神の愛が私たちの心に満たされるとき、平安と喜びと希望に満ち溢れ、どんな患難が襲って来ようとも、それさえも喜ぶことができるようになります。

③神を喜ぶ(9～11節)「それだけでなく、私たちは神を喜んでいます。」(11)

何が一番の喜び？ 神こそ喜び。

1月28日

「来臨のときに」

I ヨハネ 2:26-29

武安 宏樹 牧師

終わりの世に惑わしの霊は片時も休まず、信者は戦いを余儀なくされます。ヨハネの視線は出て行く者ではなく、「あなたがた」キリスト者に向きます。マタイ 25 章はともしびを手に花婿を迎える娘たちと、しもべの能力に応じて、各タラントの財産を預けるたとえの後に、羊と山羊の選別の話が続きますが、私たちは救いの油を常備し財産を活用して、善い行いに投資が求められます。「御言葉は客観的な防護策で、御霊の注ぎは主観的な体験であり、使徒による教えと天の教師のいずれもが、真理のうちにとどまるのに必要」(ティンデル注解)要するに御言葉と聖霊体験のバランスを取ることが、信仰生活に必要ですが、言うは易く行うは難しです。いずれか極めるだけではつかめないということ。「正しすぎてはならない。悪すぎではいけない。一つをつかみ、もう一つを手放さないがよい。神を恐れる者は、この両方を持って出て行く。」(伝道 7:16-18) 知識も知恵も必要。祈りと黙想、善行に励むことも。されど程度が過ぎると、高慢や魔境に入り訳が分からなくなる。反対に何もしないと霊性が鈍ります。改めて信仰のバランスを保つのは難しく、聖霊だけが中庸を教えてください。

「その注ぎの油が、すべてについてあなたがたに教えてください。」(27 節)は、「聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え…」(ヨハ 14:26)の繰り返しですが、主イエスは去られた後の聖霊の臨在に、ヨハネは「すべて」に力点を置くので、バランスの欠如した私たちには、「聖霊」が「すべて」を究める二重の恵みです。御言葉の字面に留まらず、文脈や行間や著者の息遣いまで恵みを受け取って、使徒の言い伝え(=神学)をマニュアル通りでなく、知的霊的に体験して悟る。教えられたとおりのことを聖霊が深めることで、いまだかつて教えられない、新しい発見に目が開かれる。御言葉にも教会にも次第に情熱が失われるのは、聖霊だけが目を開かれることを知らず、自分の力で解釈&適用するからです。聖霊は教会を生み出す動力ですから、人の行動や思考回路と雰囲気に関わり、惑わしの霊を見破ります。学者や霊能者など特別な賜物も素晴らしいですが、中途半端で取柄の無いと思われる凡人こそ、聖霊が働きやすい器となります。「すべて」からは過去と現在を思うだけでなく、再臨こそ救いの完成と語って、逆算して教勢停滞の我が国で未来を待望する、着実な歩みを可能にします。

2月4日

「私たちは神の子ども」

Iヨハネ 3:1-3

武安 宏樹 牧師

私たちキリスト者は願望や努力以前に、信じるだけで神の子です(ヨハ1:12)。肉の家族同様、子から父母の子になりたいと認知を求めることはありません。乳を飲ませ、抱き、食物を与え、歩き方を教えるのは他の動物も行いますが、社会で生きるために何が正しいか悪いかの知性を教え、処世術にとどまらず、試練を乗り越えて生きる意味を説き、自立のために二人三脚で共に歩みます。人の成長は知的&情緒的&経済的自立と、神を愛し人を愛するためにあって、人の家族は親から自立しますが、私たちは神と共に自立する特権があります。家庭環境の格差で若者の人生が左右されることを、「親ガチャ」と言いますが、人間の見方として恵まれている人とそうでない人が居ますが、共通するのは、神の前に罪人で受けるべき祝福を受けられず、自立できず、人生経験積めど、何のため生きているかわからず、他の神々や自分や有力者を頼りに生きつつ、自分を太古の昔から造られ知られ、愛して救おうとされることを見出さずに、罪を重ねて際限無く努力する空しい人生です。神の赤子として抱かれる時に、私たちは安心して力を抜いて甘えるように乳を飲み、信頼するのが大事です。

一方で神の子どもである事実を、ありのまま受け止めることに苦勞します。どうしても両親から、次いで先生や先輩や友人の言葉に傷つき影響されます。違和感と不適應を感じつつ、それでもキリストにとどまることを求めます。「私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。」(1:3)受けるだけでも求めるだけでもない、三位一体に囲まれ両側通行の交わりで、御言葉と一つにされる臨在の中に在れば、罪を犯し続けることはありません。以上の結果は「キリストが現れたときに、キリストに似た者になること」(2節)その時100%似姿に変えられます。では現状は40%か70%かわかりませんが、赦すこと、愛すること、自制することに難儀して、砕かれ祈り求める現場で、聖霊は着実にきよめてくださいます。その御手に赤子のように裸になって、在天の神と、天地をつなぐキリストの十字架と、我が内に在す聖霊を確信し、縁組された親子関係に立って、祈りの手を上げることから全ては始まります。「御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。」(ガウ5:16)御言葉は適用すると主の真実と自分の成長が分かります。

2月11日

「悪魔のわざを打ち破るため」

Iヨハネ 3:4-10

武安 宏樹 牧師

本書の流れをおさらいすると、一つ目に神とキリスト者との「タテ」の関係。罪の存在を否定し自分から肉体を切り離して、霊的体験で救われると偽装し、その暁に罪を犯しても構わないと惑わす、不法の輩「反キリスト」がいる一方、神の前に自分の罪を認めて、キリストの赦しの中を歩み続ける信者がいます。つまり罪は無いと言いつつ奴隷となる者と、罪に敗北しているように見えて実は勝利している者という逆転現象で、キリストの救いは恐ろしく公平です。されど救われてからの過程は、賜物と献身の違いで各人各様の成長をします。二つ目に「ヨコ」の関係。霊性は個人的&神秘的に非ず互いに愛し合うことが、バロメータとなります。偽り者は自己愛に熱心でも隣人愛で馬脚を現します。

本日の箇所は以上を踏まえて読むなら、罪と聖化の関係に目が開かれます。4節「罪」の一つ目は定冠詞単数で、一つの罪を犯しても不法の誹りを免れず、二つ目は無冠詞単数から、人の罪の性質や存在がそもそも不法だと示します。パリサイ人の如く小細工で律法を守るとか、金や善行では無罪になりません。5節「罪」の一つ目は定冠詞複数で、主は世の全人類の罪全てを取り除くため、二つ目は無冠詞単数から、キリストは存在的に人と違って罪は見出せません。かくて6節「凡そ主に居る者は罪を犯さず、凡そ罪を犯す者は未だ主を見ず、主を知らぬなり」(文語)となりますが、8節「罪をおこなふ者は悪魔より出づ」罪を犯して転落、悔い改めで復帰を繰り返し、不安に囚われないでしょうか。

日本語に訳出されませんが、6節「とどまる」「罪を犯しません」「罪を犯す」8節「罪を犯している」(2回)9節「罪を犯しません」「とどまっている」「罪を犯す」10節「義を行わない」「兄弟を愛さない」以上は継続を表す現在時制ゆえ、キリストにとどまるにも罪を犯すにも、いずれに帰依するか意志が必要です。偽り者は真理を知りつつ意識的に不法を生き甲斐とし、確信犯的に罪を犯し、教会に潜入して未成熟な信者を引き抜こうと、羊の皮を被った狼のようです。私たちは習慣的に犯す罪があるかも知れない。これでは救われないのでは？たしかに罪を犯せば聖霊が悲しまれ、託された証しの務めが止められますが、贖い主の証印は病根を断ち、悔い改めで「打ち破り＝解放」を日々体験します。

2月18日

「行いと真実をもって愛し合う」

I ヨハネ 3:4-10

武安 宏樹 牧師

私 10 節末尾～4 章で、偽り者が決定的に欠如している「愛」について語ります。互いに愛し合うことは救いの条件ではないので、地獄に落とされはしません。されど聖霊の働きに逆らって頑なに憎むならば、地獄の如き煩悶を喫します。よって愛せぬ人がいるならば、罪を認め御前にへりくだり赦しを得ましょう。自らの愛の無さを認めて、聖霊の働きによって愛し合う群れが主の教会です。「初めから聞いている」(11 節)とは、新約聖書では主イエスの戒め(ヨハ 13:34)、旧約聖書では人類最初の出産が殺人者となる、カインの近親憎悪から(創 4:)、素直に非を認めず食い下がる意欲も無く、傷ついたプライドで邪魔者を消す、まさに「兄弟を憎む者はみな、人殺し」(15 節) 私たちもみなカインの末裔です。

「すなわち自分と他人の命を保持するため出来る限り注意深く研究し、合法的に努力すること～慈悲深い思い、愛、同情、柔和、親切により、穏和な礼節ある言葉遣いや行為、忍耐、進んで人と和らぐこと、傷害を忍び耐えまた許すこと、罪の無い者を保護し防御すること」(ウエストミンスター大教理 135) 「悪をなす者だけがこの戒めの違反者ではない。隣人に善をなすことができ、危難災害の起こらないよう未然に防ぎ、保護し、救助できながらそれをしない人も同罪である。隣人への愛を拒み、助けられたはずの善行を奪ったからである。」(ルター大教理)

17 節で愛の不作为についても断罪します。改めて私たちは愛し合うことに、誇れるものはありません。牧師は信徒以上に嫉妬&功名心&不作为の誘惑に、悪魔から絶えず攻撃を受け、「世」からの愛を亡きものにする圧力は苛烈です。13 節で原文は「世」の直後「私たちは～」で、キリストの贖いで愛を知るに至る、「捨てる」は一回限り完結の過去時制で、罪人の捨てきれない自己愛と対照的、「分かった」は完了時制で過去に知り現在まで、主が愛を教え続ける恵みです。ただ十字架を見上げるならば、聖霊がきよめと奇跡をもって愛し合えるよう、キリストの内に在る私たちは導かれ、かくて「兄弟」(複)にいのちを「捨てる」(現在時制で継続の意)者と成ります。傷つけられた人を未だに悪く思ったり、苦手な人の陰口や、体裁良い返答で他の愛する選択肢を捨ててはいませんか。愛せないと悟るなら、主にあって愛を受け成長しきよめられ甲斐があります。